

これからの英語学習にどう向き合っていくか ～変化する英語の位置付けを踏まえて～



敬愛大学

英語教育開発センター長・国際学部国際学科教授

こうご ひであき

向後 秀明

1964年、千葉県生まれ。22年間の高校教員生活を経て、2008年に千葉県教育庁教育振興部指導課指導主事。その後、2010年に文部科学省初等中等教育局教育課程課・国際教育課外国語教育推進室教科調査官。2017年より現職。学習指導要領の改訂に深く関わり、小学校から大学まで、英語の指導と評価に関する研修を行っている。趣味はジョギング、温泉旅行、家電製品店頭チェック。

「日本において英語は外国語“だった”」と過去形で表すと、「えっ?」と思われるかもしれません。でも、日本社会は急速に変化していて、今や英語は「コミュニケーションのためのもう一つの共通語」になりつつあります。例えば、Covid-19の各国の感染対策や研究結果に関する情報は、英語を通して得ています。また、英語を母語としないアジアの人たちが集まる会議では、通常、英語で議論が行われます。文部科学省も、英語は一部の業種や職種だけでなく、生涯にわたって様々な場面で必要になることを伝えています。

そこで大切になるのは、「コミュニケーション」のとらえ方です。小・中・高等学校の新しい英語教育では、「聞く」「読む」「話す[やり取り]」「話す[発表]」「書く」の5つの領域をバランス良く学習することになります。この総合的な力がコミュニケーション力です。

「バランス良く」と言っても、5つの領域の学習時間を均等配分してバラバラに進めるのではなく、複数の領域を関連付けて学習することが大切です。基本的には、聞いたり読んだりして音声や文

字を通して得た情報や表現などを活用しながら、話したり書いたりすることにつながっていくサイクルです。例えば、趣味について話している会話を聞く→その会話を読んで、趣味の説明の仕方や必要な表現を学習する→自分自身の趣味を話したり書いたりして伝える、といった流れです。その際、話したり書いたりする英語は、聞いたり読んだりする英語よりも質が落ちるのは全く自然なことです。自分のレベルや興味関心に合わせてできるだけたくさんの英語を聞いたり読んだりしつつ、1～2年前に学習した英語レベルで表現できるようになることを目指すというイメージでいいと思います。

もう1つ重要なのは、日常生活の中で実際に英語に触れて楽しむ機会を頻繁に持つことです。学校の授業で学習したことをベースに、学校外でもどれくらい英語と付き合う時間があるかが、英語ユーザーとしての成長に大きく影響してきます。海外へ行かなくても、そのチャンスはたくさんあります。イーオンキッズの皆さんは、今まさにその経験を積んでいることになりますね。Go for it!